

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 4 月 24 日現在

機関番号：25406

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2012～2014

課題番号：24659328

研究課題名(和文) 作業療法の手法を使った認知症高齢者ケアー「できる」を生かす実践ツールの開発ー

研究課題名(英文) Care of senile dementia people by using skill of occupational therapy: developing a practical tool with their capabilities

研究代表者

近藤 敏 (Kondo, Satoshi)

県立広島大学・保健福祉学部・教授

研究者番号：70280203

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、ひとり暮らしの認知症高齢者が多少のトラブルを起こしながらも能動的に暮らせるよう、作業療法の技術を一般化し、認知症高齢者をケアする人たちに使用可能なツールを開発することを目的としたものである。介護支援専門員等21名を対象に、現在担当している一人暮らしの認知症高齢者34名について日々の生活や公的介護サービス、近所の人々や家族のサポート、その他インフォーマルなサポート等について語ってもらい、これらの情報をもとに作業療法士が既に開発した9の技能を用いて整理することにより、一般の人達に使用可能な実践的ツールとして提示した。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to develop an useful tool for senile dementia people to live alone positively even if he cause some troubles with their neighbors. The tool is basically skills of occupational therapy. Therefore, we need it to popularize for caretakers to use easily. We interviewed 21 objects, mainly care managers which were responsible for senile dementia persons to live alone and obtained information about daily life and public care services, supports of neighbors and families living apart, other informal support in 34 senile dementia persons. These data were able to explain by 9 skills occupational therapy, so we provide such concrete examples as skill also tool for senile dementia people to live alone.

研究分野：作業療法

キーワード：認知症 高齢者 一人暮らし 作業療法

1. 研究開始当初の背景

近年、一人暮らしの高齢者の増加に伴い、認知症高齢者の一人暮らしが増え、近隣住民との摩擦も増えていることが地域包括支援センターのケース検討会であがっている。認知症になったとしても、地域住民の理解、フォーマル、インフォーマルなサポートを駆使しながら可能な限り、なんとか住み慣れた自宅で一人暮らしできる方策を考える必要がある。これまで、在宅の認知症高齢者のケアに関する研究は、同居家族の指導を中心とした事例研究にとどまっており、一人暮らしの認知症高齢者を支える方策については試行錯誤の状態である。

2. 研究の目的

本研究の目的は、認知症高齢者が多少のトラブルを起こしながらもなんとか一人で住み慣れた自宅で暮らせるよう、作業療法の技術を一般化し、多くの人に実践できるツールを開発することである。

このツールの開発にあたっては、Townsendによる作業の可能化のための10の技能が有用であると考えた。しかし、この10の技能については、概念についての記述にとどまっているため、実践可能なツールとして一般化する必要があった。このツールは、作業療法の技能を実践可能なツールとすべく多面的な具体例を示すものである。本研究を行うことで、認知症高齢者のケアに携わる専門職のみならず一般の人達、また一人暮らしの親と離れて生活している家族に遠距離ケアのヒントを示すことができると考える。

3. 研究の方法

本研究の目的であるツールの開発に必要なデータを得るために、広島県三原市、福岡県飯塚市の地域包括支援センターや居宅介護支援事業所、デイサービス等に対して研究の主旨を説明し協力をお願いした。

(1)対象：協力の得られた事業所のケアマネ16名、生活相談員2名、作業療法士3名、計21名を対象に一人暮らしの認知症高齢者についてインタビューを実施した。

(2)インタビューの内容：21名のインタビュー対象者が担当している一人暮らしの認知症高齢者34名について、日々の生活や介護サービス、近所の人々や家族のサポート、その他インフォーマルなサポート等について自由に語ってもらった。

(3)質問文：「担当されている事例について、日々どのような生活をされているか、利用されている公的介護サービスや隣人等のインフォーマルなサポート等できるだけ詳しくお聞かせ下さい」

(4)データの分析：インタビューで得られた対象者の語りを1内容ごとにデータ化し、

Townsendの作業の可能化のための10の技能、すなわち 適応、代弁、コーチ、協働、相談、調整、デザイン・実行、教育、結び付け、特殊化のいずれかに当てはまるか4名の研究協力者と協議しながら作業を行った。

(5)調査期間：平成25年10月～平成26年3月であった。

(6)理的配慮：インタビュー対象者に口頭と書面で研究の目的を説明し承諾を得た。

4. 研究成果

一人暮らしの認知症高齢者34名(男性8、女性26)に関するデータが得られた。その結果、10番目の技能である「特殊化：専門的技術を用いた実践」を除いた9の技能が用いられていた。

(1)1事例を以下に示す。

A氏 90代女性 アルツハイマー型認知症、要介護。夫は既に他界。子どもはおらず、姪と甥はいるが、関係は良好ではない。数年前より物盗られ妄想が強く、「金庫のお金を盗られる」、「姪・甥が家に勝手に入って物を盗っていく」、「夜中に誰かが家に入ってくる」といった妄想があった。また、近隣住民に怒鳴ったり、夜中や朝方に電話をかけたりということがあった。現在、作業療法士とケアマネがキーパーソンとなり以下のような支援・かわりを行っている。

自宅での火の消し忘れ予防のために、「火は消しましたか？」と書いた張り紙をガスコンロの前に貼っている。また、ガスは消火装置付きのものを使用している。電子レンジには中に食材の置き忘れ防止のために「電子レンジの中に物は残っていませんか？」と書いた張り紙をし、冷蔵庫は閉め忘れ防止のブザーのついたものを使用している(適応)。

鍵がなくなった、姪が物を盗っていくという訴えに対し、家の鍵をすべて交換したり(適応)、大事なものだから自分でどこかにしまっている可能性もあると伝え続けることにより、物がなくなったことで誰かを疑うのではなく自分から「私がどこか隠したんかね？」と言うようになった(教育)。鍵の管理については自身で鍵を保管した場所を忘れてしまうということがよくあったため、現在は鞆に鍵をくりつけている(適応、調整)。

本人が必要のないものを買ってしまった際には、クーリングオフ制度を利用したり、本人に代わり、もう電話をかけないように相手に伝えた(代弁)。

日々の記憶が難しいので、作業療法士が本人の記憶の肩代わりをするようにしている。(自分は覚えることはできないが、先生が覚えてくれている安心感がある)(相談)。また、キーパーソンである作業療法士が本人の気

のではないかと考えられた。

代弁

代弁とは「クライアントをよく知る人が、クライアントに代わって、周囲に伝えること」と捉えた。今回挙げた事例には、家族の許可を取ったうえで、本人が認知症であるということを福祉サービスに関わる者が、近隣住民に伝え、認知症に対する理解を得ているものがあつた。認知症高齢者は、薬や金銭などの管理が難しいため、薬の飲み忘れや消費者被害に遭っている現状がある。そこで、薬の飲み忘れに対し服薬時間や種類の変更（まとめる）を医師に訴えたり、消費者被害に遭った場合には、クーリングオフや、商品の受け取り拒否を行ったりと、本人に代わって対応していた。これは、本人の困りごとに対して、代わりに周囲に伝えること、また適切な対応やサービスの選択を手助けすることで、一人暮らしを支えることができているのではないかと考えられた。

コーチ

コーチとは「クライアント又はクライアントをよく知る人に対して、促したり励ましたりする、声掛けをすること」と捉えた。今回挙げた事例には、入浴拒否やサービス受け入れ拒否の訴えに対して、一度の声掛けではなく、繰り返し声掛けを続けることで受け入れが可能となったものがあつた。これは、認知症高齢者は認知機能が低下しており、状況が変わることへの不安があるためだと考えられた。例えば入浴の場合は、裸になることへの不安や、脱衣の手順を忘れていても考えることができた。不安に寄り添うような声掛けをすることや、手順を繰り返し伝えることで、安心感へとつながり、挑戦することへの動機づけになるのではないかと考えられた。

協働

協働とは「クライアント又はクライアントをよく知る人と共に、共通の目標に向かって一緒に取り組むこと」と捉えた。近隣商店が、認知症を理解しており買い物が出来るように一緒に取り組んでいる例や金銭管理について郵便局の協力がある例があり、地域の人による見守り、安否確認などにより、認知症の方が一人暮らしを継続できるように、周囲の人々が連携をとっている例が多かつた。特に、人口や住宅の少ない地域では、近隣住民の協力が多く結果となつた。その要因として、昔から住む地域であり、近所づきあいが豊富であること、人口が少ないため顔見知りになりやすいこと、また以前からの助け合いが続いていることが考えられた。

相談

相談とは「クライアント又はクライアントをよく知る人と、意見の交換や相談をすること」と捉えた。今回挙げた事例の多くは、

ケアマネと家族やケアマネと地域の人、また本人を理解してくれている人々で相談を行っていた。相談内容については、服薬管理、金銭管理、サービスの利用についての相談が多くあつた。これらは本人にも説明をしているが、認知症により、理解や判断が難しいことが多い。そのため、ケアマネと地域の人、また家族など、その人を理解してくれている人が、本人に代わって意見を交換し合い、協議することが大切であると考えた。また、本人と相談を行っている事例では、寂しさの訴えを聞く、被害的な言動や愚痴に共感する等があつた。認知症高齢者は、記憶や判断力が低下しているため、自身の発言を否定されることが多くあるのかもしれない。自身の発言を否定せず相談に乗ってくれることで、理解してくれる、自身を受け入れてくれていると感じるのではないかと考えられた。

調整

調整とは「クライアント又はクライアントをよく知る人と共に、環境や資源を整えること」と捉えた。認知症高齢者が生活を維持できるように、多くの事例で周囲の環境を調整している。本人がゴミ出しを適切にできないため、ケアマネが町内会と交渉しヘルパーが来る日に捨てられるようにする事例もあつた。その他、金銭管理は福祉サービスを使い、服薬管理はヘルパーや家族が対応するなどして調整していた。サービス利用について拒否される事例も多く見受けられたが、喪失体験（家族の死、転倒等）からサービスを受け入れるようになった事例もあり、サービス導入の時期やタイミングも重要なのではないかと考えた。調整もまた、適応と同じように本人自身の考えや習慣を変えるのではなく、周囲が本人に合わせて環境を変えること、利用できる福祉サービスを組み合わせることが必要なのではないかと考えた。

デザイン・実行

デザイン・実行とは「クライアント又はクライアントをよく知る人の為に、フォーマル・インフォーマルな資源を利用すること」と捉えた。今回挙げたほとんどの事例でデイケア（デイサービス）、ヘルパーなどの福祉サービスを利用していた。これは、認知症高齢者に対し毎日数時間でも家族以外の誰かが見守りを行っている状況が作られているのではないかと考えた。また、認知症高齢者にとって難しくなってくる服薬管理や金銭管理、入浴においても福祉サービスの利用により可能となつていた。

教育

教育とは「クライアント又はクライアントをよく知る人に、実践的な方法や情報を説明したり教示したりすること」と捉えた。介護認定により受けられるサービスが異なること

を本人，家族に説明する事例があった．福祉サービスの導入について説明する際，一度の説明だけでは理解が難しかったが，何度も説明することで受け入れが可能となった．記憶力の低下や新しい環境への適応が難しいこと，また慣れ親しんだ習慣を変えることに対しての不安もあったと考えられたが，本人の状況を理解し，繰り返し説明することで，不安を取り除くことができたのではないかと考えた．また，家族に対して福祉サービスの説明を行うことで，サービスの利用が家族の負担軽減につながることを知ってもらうことができるのではないかと考えた．

結び付け

結び付けとは「クライアントとサービス，作業，または地域と結びつける機会作りをすること」と捉えた．結び付けには，福祉サービスへの結び付けや，近隣住民との結び付けがある．認知症高齢者が，そのまま地域で暮らしていくためには，周囲の協力や福祉サービス利用が必要不可欠である．新たに結び付けるのではなく，それまでの関係を断ち切らないように，本人の状態を伝え周囲の人々の協力を得ること，またデイケア（デイサービス）やヘルパー，訪問リハビリなど，サービスの利用へ繋げることで一人暮らしを継続できるのではないかと考えた．また作業との結び付けには，手芸，畑仕事，絵画教室，将棋，お茶などの趣味との結び付けがあった．これらは，本人が以前から継続していた作業やデイケア（デイサービス）で始めた作業であった．家では庭いじり，デイケア（デイサービス）では簡単な畑作業で昔のことを再体験し精神安定を促している例があり，作業をすることで，不安が和らいだり，精神状態が安定する．このように，デイケアや自宅で役割や仕事を持つことで精神状態の安定につながるのみならず有能感も得ることができたのではないかと考えた．

本研究において，一人暮らしの認知症高齢者がその暮らしを継続していくために必要なことを作業の可能化のための 10 の技能で解釈し整理することで，ツールの開発に必要な基礎データを揃えることができた．1 つの技能を除く 9 の技能でほとんどのデータが当てはまった．これらの多くは専門職の技能を必要としないものであり，一般的人々にも使用しやすい技能であった．しかし，多くの人々が実践可能にするためには，これらを技能として視覚化する必要がある．このことで，今まで行っていたケアを整理することができ，不足している技能を見つけることができると考えた．このツールを利用していくことで，結果的に多少のトラブルがあってもなんとか自宅での生活を維持する事が出来るの

ではないかと考えた．また，一人暮らしの親と離れて生活している子ども達に，遠距離ケアのヒントを示すこともできると思われる．

引用文献

エリザベス・タウンゼント，ヘレン・ポラタイコ・編著：続・作業療法の視点～作業としての健康と公正．大学教育出版．2011．

5．主な発表論文等

〔学会発表〕(計 1 件)

近藤 敏，認知症高齢者の一人暮らしを支えるためのツールの開発～Townsend の作業の可能化のための 10 の技能を用いて～，2015 年 2 月 21 日，JA AZM 別館（宮崎県・宮崎市）

6．研究組織

(1)研究代表者

近藤 敏 (KONDO Satoshi)

研究者番号：70280203

(4)研究協力者

浅野 奈緒 (ASANO Nao)

國原 萌美 (KUNIHARA Memi)

廣瀬 靖大 (HIROSE Yasuhiro)

藤澤 のどか (FUJISAWA Nodoka)